

名人の時間

モンゴルで見つけた成長のカギ

小学6年生の時から途上国などへの国際的な支援活動に関心を持っていたので、このツアーに魅かれたことが地元のアナウンサーから遠く離れた名寄に來た動機の一つだ。

できる、文化的な体験ができるということに魅かれたからである。

重要性は日本でもよく聞いていた。

しかし、実際にモンゴルの生活の一部に触れ、このように当たり前が当たり前ではない場面に何度も遭遇したときに、ようやくその言葉が現実になり意味が分かった。価値観が壊されるたびに、自分の視野の狭さに気づき、見えていなかった世界が少し開いた気がした。

また、私は栄養学科で教職課程を履修している。モンゴルの学校給食の現場を目にして栄養の偏りをなくすこと、栄養の指導者や知識の必要性を実感し、途上国としての課題を感じたとともに他国への興味や自身が途上国にできることへの期待を感じた。

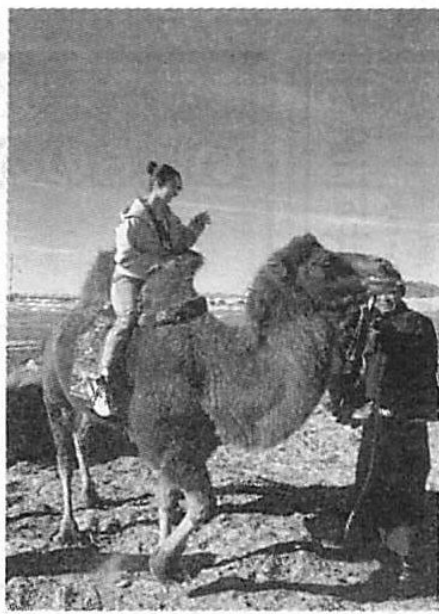
モンゴルで笑顔で給食を頬張る子供たちを見て、笑顔や健康のために子供たちにより身近に伝えられる立場として学校現場に携わりたいたという気持ちが強くなった。このツアーに

参加し、学年学科を超えて同じ旅に参加した仲間やモンゴルで多くの人との出会いがあった。

自分と同じ方向を向いて歩く人たちと話すことは、将来を考える今の私にとって大きな刺激となった。私は実際に現地

流し、そこで暮らす人の声を直接聞くことの大切さを感じた。今回の経験は将来へ踏み出すための糧とし、この学びをもとに途上国に貢献できる力を身につけていきたい。

栄養学科1年
加藤菜々花



私はこの夏、スタディツアーに参加しモンゴルへ行った。

このツアーに参加を決めた理由は、都市と地方の両方に行き格差を自分の目で確かめられる、JICAに関する施設や当学の専門に沿った施設に訪れることが

概念が壊された。視野を広く持つことの

また、私は栄養学

科で教職課程を履修

している。モンゴル

の学校給食の現場を